

旧制高校からみた「青春」概念の形成

依岡隆児

はじめに

本稿は、旧制高校が日本の近代化において「青春」概念を定着させる役割をはたしたことを、ドイツとの関係を中心に明らかにすることを目的としている。着眼点は、青春があって旧制高校でそれが広まったというよりも、むしろ旧制高校ができて、それに合わせて青春が加工・形成されたとみる点にある。

西洋近代化の中で各界のリーダーとなるエリートを輩出し、いまや伝説となった旧制高校は、教育史的にみても、また世界的にみても、ユニークな高等教育機関だった。それは単に近代的教育制度であっただけではなく、日本の伝統的側面も取り込んでいたためである。藩校の伝統を引き、地方の土地土地に根差した校風を培い、新たな愛郷心も芽生えさせていた。エリートのための贅沢品と揶揄されることもあったが、一方で日本の近代社会に独特な色合いをもたらしたことも否定できないのである。

ここではこうした旧制高校を、近代以前の日本にはなかったとされる「青春」を容れる「器」とみなし、日本の近代において「青春」がいかにかに形作られていったか、そしてそれがいかにドイツからの影響を受けていたかを明らかにする。

ドイツとの関わりを中心にしたのは、青春の概念が旧制高校で根付くのは、大正から昭和にかけてと考えられるが、それには当時入ってきたドイツ文化の影響が大きかったからだ。ドイツの教育制度などを参考にし、外国語、特にドイツ語が重視されたばかりではなく、教養主義や青春小説が流行し、ドイツ人講師たちと「学生」（旧制高校生は「生徒」ではなく「学生」と呼ばれた）たちとの全人的交流が展開された。こうした旧制高校的なドイツ文化受容が日本の「青春」の概念化にある種の傾向をもたらしたと考えられる。そこでここでは、旧制高校において人気だったドイツの小説・戯曲に注目した。

本稿ではまず、旧制高校の制度を略述し、次に当時の旧制高校生たちが『アルト・ハイデルベルク』などドイツの文学作品に青春の象徴を見ていたことを明らかにする。そのうえで、ドイツ「青春」文学の受容を跡付けながら、旧制高校の「青春」のあり様を具体的にみていくこととする。

青年たちは西洋化一辺倒で物質主義に傾く風潮に不安を抱き、アイデンティティの拠り所を求めていたが、その受け皿となったのが、旧制高校の青春だった。だが、そうした旧制高校も第二次世界大戦後は廃校となり、それ自体が郷愁の対象となってしまった。ここでは旧制高校が第二の「ふるさと」となっていった点にも注目している。近代化で動揺す

る精神が拠り所を求める動きとして、植民地下にあった台北高校の事例も紹介したい。

1 先行研究

「青春」概念については、近年では三浦雅士『青春の終焉』が、明治にYMCAの訳語として「青年」が使われて以来、「青春」のブームが起り、戦後になってそれが「終焉」していったことを論じている¹。ただここでは外国、特にドイツからの影響はあまり指摘されていない。大正から昭和にかけてのドイツから入ってきた青春ものの影響は、旧制高校がドイツ語重視だったこともあり、やはり大きかったのであり、このドイツの青春のイメージが従来の青春概念を変容させていったことは無視できないだろう。

旧制高校と精神風土に関する先行研究としてはまず、天野貞祐が戦後の第一高等学校校長として、友情・純粋性こそ高校の本質であるべきだと、旧制高校を擁護した²。また教育社会学の竹内洋が、旧制高校は近代日本の成立に欠くことのできない制度だったという見方を示し、さらに、旧制高校的なものは、戦後も生き残り、学生運動まで継続したとしている³。また『旧制高校全書』など、旧制高校の資料整備に尽力してきた橋本左門は、旧制高校は独自で完結したものとなったとしている。それは「きわめて特異な存在」で「世界的に見てもユニーク」な教育制度だったとし、そのあらわれとして、「校風」の発展を取り上げ、精神風土を説明している⁴。

他方、天野郁夫は旧制高校の高等教育機関としてのあり方自体を疑問視している。旧制高校はリベラル・アーツ・カレッジに相当するとされることがあるが、中等教育とリベラル・アーツ型高等教育の間での妥協の産物である。中途半端な制度で、その教養理念も不十分に終わり、結局は「学歴稼ぎ」を社会に定着させることとなったと否定的にみている⁵。

また独文学の高田里恵子は旧制高校ドイツ語教師と教養主義、ナチスとの関わりに注目して、その功罪を問うている。「ドイツ文学者としてナチスの旗振りをした者たちは、たいてい旧制高校のドイツ語教師」として、「悪名高い教養主義」が旧制高校を温床にして広まったとする。さらにこの旧制高校の文化には、特にドイツ青年運動の影響があったことを指摘している⁶。

同じく批判的なのは、京極純一と佐藤忠男の『学校と世間——進学文明を超えるもの』で、その階層性と庶民性という相矛盾した現象をとりあげて、旧制高校を批判的に見てい

1 三浦雅士『青春の終焉』講談社、2001年。

2 『天野貞祐全集』第5巻、日本図書センター、1999年、28頁。

3 竹内洋『教養主義の没落——変わりゆくエリート学生文化』中央公論新社、2003年。竹内洋編『学校システム論——子ども・学校・社会』放送大学教育振興会、2002年。

4 高橋左門「旧制高等学校における校風」『国立教育研究所紀要』第95集、1978年、149頁。

5 天野郁夫『学歴の社会史——教育と日本の近代』平凡社、2005年。

6 高田里恵子『文学部をめぐる病い——教養主義・ナチス・旧制高校』筑摩書房、2006年、16頁。

る。⁷

一方、アメリカのローデンは旧制高校を外からの視点で見ている。旧制高校をエリート高等教育として、欧米の中・高等教育機関と比較している。イギリスのパブリック・スクールやドイツのギムナジウム、フランスのリセなど、西洋の寄宿舎付きのエリート学校との類似性を挙げている。それと同時に、江戸時代の藩校の伝統を継承していて、地方の高校誘致運動なども指摘している。実際、文部省は徳川時代の学問的な土地柄を候補地にした。こうしてできた校風や青春概念で硬派と知的学生の間で親密な和解が可能となったとし、校風・郷土意識はやがて国家への支配に吸収されていくとしている。⁸

以上のように、日本の近代化を推進するエリートを育成し、ある種の文化風土を培い、独自性を有したとはいえるが、一方でその制度的な不完全性も否定できず、社会的格差を固定化し、全体主義の時代においては国粹主義に取り込まれてしまったという見方が、これまでの旧制高校と精神風土についての最大公約数的な評価ということになるだろう。旧制高校を学閥の温床とみる見方や旧制高校復活論は極論としても、今なお、その評価は割れている。

それに対して、ここでの私の着眼点は、制度的な検証でも、エリート教育の場として評価するものでも、またナショナリズムの要素をめぐり出すものでもなく、ドイツとの関わりを中心に旧制高校の精神風土の形成にスポットをあて、日本における「青春」概念の形成・展開をみていく点にある。

旧制高校関連文献を見てみると、「青春……」「郷愁（ノスタルジー）」という題名・テーマが多いことに気づく。「旧制高校」＝「青春」、「旧制高校」＝「郷愁・ノスタルジー」と結びついているのは、一体なぜなのだろうか？ その問いに答えようとするのが、旧制高校のもう一つの存在意義に迫ることになるはずである。

2 旧制高校とは

まず旧制高校の制度史を概略しておく。1886年に帝国大学令と中学校令が出され、東京大学予備門が第一高等中学校になった。そして1894年の高等学校令でこの高等中学校は高等学校になる。文科・理科に分け、専門学部を中心とする方針だった。第三高等学校や第五高等学校に工学部ができ、後に工業学校や医専として独立する。だが結局、3年制の大学予科のみ高等学校となる。また第六～第八高等学校が新設された。

受験生の増加にともなって1918年の大学令で単科大・私立大が認可されたが、このときの第二次高等学校令（高等学校令改正、1919年施行）で「高等学校ハ高等普通教育ヲ授

7 京極純一・佐藤忠男『学校と世間——進学文明を超えるもの』中央公論新社、1978年。

8 ドナルド・T. ローデン／森敦監訳『友の憂いに吾は泣く——旧制高等学校物語』上下、講談社、1983年。

ケル所トス」とされ、大学への予備課程としての性格より、高等普通教育を完成する独自の役割が打ち出された。「中流以上の生活にはいるための教育機関」とされ、公・私立高校が認可され、地名スクールが新設された。尋常科4年、高等科3年の7年制を基本にするとしながらも、高等科のみ的高校も認めるとしたことで、従来通り3年制を踏襲する高校が多かった。公・私立もあわせ38校を数えた。内訳は、ナンバースクール8校、地名スクール18校、帝国大学予科3校、7年制高等学校9校である。19年に春入学に移行した。

1942年には戦時体制下で、修業年限が6カ月間短縮され、1943年の高等学校令ではさらに2年に短縮、徴兵猶予が停止され、学徒出陣となった。1948年には新制大学・新制高等学校が発足、6-5-3-3制から6-3-3-4制へ移行し、5年の旧制中学校が新制中学と新制高校となった。こうして旧制高校は消滅することとなり、1950年に幕を閉じる。

ほとんど男子のみのエリート教育機関で、同世代の1パーセントしか入学できなかった。規模の割には予算も多く、「帝国の贅沢品」と揶揄されることもあった。高校の入試は徐々に競争が激しくなっていくが、入ってしまえば大学のどこかには入れたので、大学までのモラトリアムとして、自由を謳歌することができた。

文科・理科という分け方は大学の専門を想定して分けられていたのを簡略化したものだが、今日までこの分け方が固定されてしまった。甲・乙・丙類というクラス分けでは、第一外国語がそれぞれ英語、ドイツ語、フランス語に割り振られた。第一外国語では7～800時間履修するなど語学重視で、人文学中心のカリキュラムだった。

旧制高校の最大の特徴は寄宿舎制だろう。籠城主義ともいわれる学生の自主・自由を重んじる方針が貫かれた。独特の儀式文化や風俗を産み出すこととなる。ロマン主義的で脱俗的な教養主義・修養主義、バンカラ気風や校風は代々ひきつがれていった。

郷土色もあった。地方の有力県に分散させて設置されることとなり、有名な藩校のある地から候補地が選ばれた。

たとえば、旧制水戸高校は、江戸時代の「弘道館」の伝統を受け継いでおり、この藩校を作った徳川斉昭の和歌、「物学ぶ人のためにとさやかにも暁告ぐる鐘の声かな」から「暁告ぐる鐘」に因んで寄宿舎を「暁鐘舎」と名付け、「学生警鐘」という鐘も設置した⁹。ここには水戸学への懐古の念がこめられていたのである。また地元を挙げた誘致合戦もあった。六高設立の際には岡山と広島との間で激しい誘致合戦となる。国会で代議士が掴み合いを演じるほどのエキサイトぶりだった。鳥根と鳥取の誘致合戦も激しかったが、鳥根が予算の相当額を肩代わりするなど、総じて地元の支援も決定にあたっては大きかった。そのため、地元も高校を誇りにし、生徒たちも地元の人々と積極的に交流した。

名物校長の神話化もあった。一高の新渡戸稲造や、高知高校の江部淳夫、台北高校の三

9 山極圭司『青春三十年——旧制水戸高等学校物語 1920-1950』朝日新聞社出版サービス、1999年。

沢糾らは創設時において伝統の形成にあずかった。

一高から八高までは「ナンバースクール」とか「n高」とかいわれ、それ以降は「地名スクール」とか「ネームスクール」と呼ばれたが、9番目は新潟と松本で争われた。あまりの中傷合戦の激しさに、結局「第九……」という命名を避けて、地名をかぶせることで決着。以降にできた高等学校は、「地名スクール」となった。

以上のように、旧制高校は明治以前の藩校や若者教育と欧米のアップーミドル階級の中・高等教育制度が合わさり、独自の教育制度となったものといえる。たしかにドイツなどの影響は大きかったが、とはいえ単純に欧米の中等教育機関と比較することはできない。大学までの予備的機関だったともいえるが、それ自体が独自で、日本の若者に自由で自主的な雰囲気をつくりだせることとなる初めての制度だったのである。

3 ドイツの影響

さてそれでは、ここからは日本とドイツとの関わりを中心に、旧制高校をみていくこととしよう。

ドイツ文化・風俗の影響としては、1886年の中学校令に際して、高等中学校をドイツ式に制度化するために伊藤博文と森有礼によってドイツの教育学者ハウスクネヒトが招聘されたことがある。山口高校の授業プラン立案が残っている。そこには「KOTO GAKKO」は「Lyceum」と訳されている¹⁰。つまり、フランスの「リセ」と同じものとみられているのである。

また1894年の高等学校令における「高等」学校という名称はドイツ語の Hochschule (単科大学) を翻訳したものである。したがって今の高校ではなく、ましてやドイツのギムナジウムのような中等教育機関ではなく、この時点では単科大学・初級大学レベルを想定していたことがわかる。また英語では「カレッジ」と訳されることもあるように、イギリスの「カレッジ」をモデルにしたとも言われている。

ドイツ人講師も全人的交流をあちこちで展開していた。ドイツ語やドイツ文学を学ぶ者が多いせいで、旧制高校では奇妙なドイツかぶれ現象も起こっていた。たとえば四国には旧制高校がいわゆる「地名スクール」として、松山と高知にあった。ここでは英・独語の第一外国語別に甲・乙類に分けられていた。フランス語は置かれていなかったが、ドイツ語ではネイティヴの教師が雇われていた¹¹。

旧制高知高校に赴任したゴットロープ・ポナーはこのときのことを扱った紀行・エッセイの本を2冊残している。そこでは彼は旧制高校を Vorhochschule と呼んでいる。つ

10 Hausknecht. *Lehrplan fuer Japanische Lyceum (KOTO GAKKO) in Yamagutsi*. 大倉精神文化研究所蔵。

11 上田浩二・荒井訓『戦時下日本のドイツ人たち』集英社、2003年。戦時下において各地の旧制高校に赴任していたドイツ人教師のことが紹介されている。高知のエーヴェルスマイアー（エーバースマイアー）のことも出ている。

まり、大学前期である。そして、地元の人々がこれを誇りにしているのも、ドイツにおける大学と同じだとする¹²。他方、旧制高校の外国人講師は外国人といえば地方都市ではキリスト教会の牧師くらいしかいなかった当時、貴重であった。それだけ町の人々も大事にした。妻子を連れていたこともあり、ゴットロープは普通の日本の生活を満喫することができ、数々の日本人との交遊ドラマを生んだ。帰国してから戦後、わざわざゴットロープを訪ねてドイツに行った元旧制高校生もいた。

旧制高知高等学校は文科に甲類が2組、乙類が1組で、理科は甲類、乙類にそれぞれ1組ずつあった。同窓生の談によると、文甲では年間、第一外国語の英語は270時間、第二外国語のドイツ語が90時間、文乙では第一外国語のドイツ語が330時間、第二外国語の英語が120時間で、文乙の方が語学の時間が多かった。週32～3時間のうち語学が十数時間だったことになり、語学の授業がいかに重視されていたかがわかる¹³。こうした語学と人文学重視の制度ゆえにドイツからの新しい文化や風俗が入り込んできたのである。

当時の高等学校はどんなふうだったのだろうか。ロベルト・シンチンガーが、1923年から42年まで勤務していた大阪高等学校での最初のクラスについて、こう述べている。

「きたない制服を着て長髪の人目をひく学生たちは、ひげもそらず、わきに手ぬぐいをぶらさげ、はだして巨大な下駄をはいていた。(中略)クラスが騒々しくなると、私は子守歌をうたわせた。そうすると静かにおとなしくさせることができた¹⁴」。

当時の高等学校には蛮カラな気風があったことがわかる。しかし、シンチンガーは学生とすぐに「良い友」となり、付き合いは今日まで続いているという。さらに、地方の高等学校に勤務した若いドイツ人講師の中には、こうした自由で飾り気のない学生たちの中に飛び込んでいって人間関係を築いた者たちもいた¹⁵。またシンチンガーは高校生の学力は、ドイツのギムナジウムよりも上で、大学初級にあたと評価していた。こうしたドイツの文化的影響を強く受けながら、「青春」が旧制高校に根付いていったのである。

4 概念「青春」

それでは、その「青春」という概念の方は、日本ではどういうものだったのだろうか。「青春」という言葉にあたる youth (英語)、Jugend (ドイツ語) は、明治6年『薩摩辞書』では「少年・若者、若輩、幼少、童」とあるが、この時点ではまだ「青春」という意味は出ていない。明治初年にはまだ「青春」という言葉は一般的でなかったことがわかる。

むろん「青春」という言葉自体は日本にもあった。中国の五行説で春は青色とされることから、日本にも入ってきていた。「青」のイメージは「青臭い」とか「青二才」といっ

12 Gottlob Bohner. *Nach Ostasien im Zeichnen des Wiederaufstiegs*. Birkfeld-Rahe, 1931.

13 『自由を空に——旧制高知高等学校外史』南溟会・旧制高知高等学校同窓会、1982年、85-86頁。

14 Gedankenschrift für Robert Schinzinger. Tokyo, 1990, S. 9. (1986年の“Vita”より)

15 参考、旧制松本高等学校に勤務したヘルベルト・ツァヘルトについては、ズザンナ・ツァヘルトほか『ズザンナさんの架けた橋——日本とドイツ 私の87年』(集英社、1996年)に詳しい。

た言葉にあるように、「若さ」「未熟さ」と結び付けられるようになった。だが江戸時代にはこの言葉の指す時期は明確には存在しなかった。元服したら大人というのが、表向きの見方だった。むろん、子供から大人になる移行の時期をある種のイニシエーションとして位置付けるということは日本でも工夫されていた。だが「青春」といった独立した概念として定着したのは、やはり西洋化の影響を受けた後のことだったのである。

子供と大人の間の時期があいまいで、区別されていなかった日本において、旧制高校はやがて大学（大人）への予備的存在ではなくなり、制度としてこの時期を画するものになったといえる。個人の思春期と近代国家へと向かう若き日本という二重の不安定状況にあって、若者の拠り所となるのがこの旧制高校の「青春」だったと考えられる。

5 青春小説

こうした「青春」の定着には、文学や当時の読書文化の影響も大きかった。日本の近代小説で青春小説が登場するのは19世紀末からだろう。その後、漱石の『三四郎』や鷗外の『青年』、紅葉の『金色夜叉』でブームとなり、やがて『伊豆の踊子』も現れた。こうした小説の多くは旧制高校の学生たちが主人公だった。戦後は新しい時代の自由・自立の概念を体現するような石坂洋次郎の『青い山脈』などで、青春ものがまたブームとなった。

ただし『金色夜叉』では一高生は貧乏で、女は金持ちの元に走るという設定である。ここでは旧制高校生はエリートというよりは地位も金もない青年の無力さの方がクローズアップされている。この点ではヘッセの短篇「ラテン語学校」の設定と似ている。一方、『伊豆の踊子』では、一高生は踊り子から見ればエリートの卵として身分違いの存在であり、それゆえに、二人の関係は悲恋に終わっている。

『ケンチとすみれ』¹⁶は阪田寛夫がNHKのテレビドラマとして書いた脚本から柘和典が小説にしたものである。阪田は戦争末期に過ごした旧制高知高校の寮の思い出をもとにドラマに仕立てた。同じ寮に三浦朱門もいて、彼がモデルでもあった。純情で一本気なケンチは同じ寮生たちと楽しく、破天荒な青春を送っていた。そのケンチと散髪屋の娘すみれとの淡い恋とすれ違いを中心に、戦中と戦後の混乱の中で、若者たちがそれぞれの道を見つけていく姿を描くものである。結局、ケンチとすみれは結ばれなかった。

『三四郎』で「偉大なる暗闇」とされる広田先生は、一高の名物教師・岩元禎がモデルとされる。高橋英夫『偉大なる暗闇』¹⁷に詳しいが、彼はドイツ語と哲学を教えていて、一時期漱石とも同僚だった。しかし実のところは、漱石のこの小説が出てから、一高でそのモデルは岩元ではないかという憶測が出て、それ以降「偉大なる暗闇」とあだ名されるようになったのだという。独身主義と美少年趣味を持つ変人で、情け容赦なく落第点をつけた。

16 柘和典『ケンチとすみれ』河出書房新社、1991年。

17 高橋英夫『偉大なる暗闇』講談社、1993年。

明治32年から昭和16年まで勤務し、その間昭和7年からは哲学も講じた。ケーベルの弟子である岩元のことを、高橋はケーベルと同様に同質性の関係を要求する「ホモ・アミクス」と呼び、「師弟関係も友人関係も等しく友情空間の中での友の交わりを意味していた」¹⁸とみている。外国の本を読むばかりでそれをもとにした自己表現はしない。愛書家で西洋文化への畏敬からそれを取り入れることに徹した旧制高校教師のひとつの典型だった。高橋のいう「友情」は弟子たちに対しても示された。外界への無関心、几帳面な完全主義とエピキュリアンの側面も旧制高校の「青春」の一側面だったのだ。

ドイツの青春小説の移入も大きかった。旧制高校でドイツ語とドイツ文化が重視されていたため、ここがドイツからの青春概念の受け皿ともなった。

ヘッセ、シュトルム、カロッサ、リルケ、トーマス・マンなどが当時の旧制高校では読まれていた。しかし、実際はヘッセの作品はドロップアウトした青年を描いていて、どちらかというところと反青春小説である。また一般に、ドイツ語圏の学園ものはいじめや受験競争からドロップアウトした生徒や封建的な学校体制への批判とネガティブなものが多い。ところが、こうしたドイツの文学作品が日本では青春小説の典型とみなされていたのである。日本に入ってきたときには、選択が働いていたから、教養主義的なバイアスが作用したことは否定できない。

たとえば、ヘッセは南ドイツの田舎町出身だ。二つの世界大戦では反戦の立場をとりつつ、常に自然への畏敬の念をもって創作活動をし、晩年にはスイスの山に住み庭仕事をして過ごした人である。日本では青春教養小説の作家であるとともに、自然豊かな故郷への思いがひととき強い作家として受け入れられていた。『ペーター・カーメンツィント』は1937年の関泰祐訳では『青春彷徨』とされ、高橋健二訳では『郷愁』とされた。いずれも意識だが、日本ではこの作品、いやヘッセ自身が「青春」作家であり、「郷愁」を描く作家というステレオタイプができていたことがわかる。他方、日本では『知と愛』『シッダルダ』『ガラス玉遊戯』のような思想小説はあまり人気がない。

またヘッセの『青春は美わし』は高校から帰省した生徒の故郷での淡い恋心を描いていて、これも当時の旧制高校で読まれていた。ちなみに『車輪の下』では神学校が、『デミアン』ではラテン語学校（ギムナジウム）が舞台である。ハインリッヒ・マンの『ウンラート教授』は映画『嘆きの天使』の方で知られたが、ここでもギムナジウムが舞台で、高校の先生がバーの踊り子に恋をするという話だ。ギムナジウムの生活が知れる点でも興味をひかれただろう。またエリート階級の人々と世俗の人々のギャップと交流の中で青春が描かれているともいえる。シュトルム『みずうみ』などもよく読まれたが、これも青春時代を振り返る「郷愁もの」だ。

このように、これらのドイツから入って来た作品は、ギムナジウムを舞台にしたものが多く、青春時代を回顧するという点や、純粹さと脱俗性をたたえている点に特徴があった。

18 同書、248頁。

こうした旧制高校を中心に広まったドイツの青春ものの文学作品が日本の「青春」を作っていたのである。

ちなみに、たとえば日本におけるゲーテ『ファウスト』受容も、教養主義的な読み込みにあたるだろう。「時よ、とまれ！ お前は美しい」という言葉に象徴されるように、人生の絶頂期を味わいたがために悪魔と契約をするという話である。その意味では、この作品は青春を取り戻すということがテーマにされていたともいえよう。

戦前の教養主義が強かった時代から、これは未熟な人間がこの世界を体験し、人格的に成長して、個人を越えて社会に開かれていく、いわば究極の「青春」像を表現したものである。作品のテーマは「人格形成」「人間的発展」とされてきた。旧制高校でも『ファウスト』が教養主義的に受容されている例として、一高の校長だった新渡戸稲造の「ファウスト」講演がある。これはカーライル経由のゲーテ受容によるもので、やはり教養主義的な人格主義が前面に出されていた。

多くの旧制高校の授業においてこの作品がテキストとして、また題材として取り上げられていった。ペツォルトの一高時代の授業風景を写した写真を見ると、黒板に「人間は努力するかぎり、迷うものだ」というドイツ語が書かれている。¹⁹『ファウスト』のあの有名なセリフだ。一高教師・竹山道雄も戦後『ファウスト』を講義した。旧制高校でのこの作品の教養主義的受容は、日本における受容のひとつの偏向を示している例といえよう。

6 アルト・ハイデルベルク

こうした日本近代における「青春」概念の定着におけるドイツからの影響として注目したいのが、ドイツの戯曲『アルト・ハイデルベルク』である。この作品は旧制高校で愛され、これを振り返るときに代名詞のように用いられ、いわば青春のシンボリックな作品として受容されたものである。そのあまり、いまだそのイメージも定かでなかった日本の「青春」が「アルト・ハイデルベルク」風に加工されたとも言えるかもしれない。各地の旧制高校でこの作品への言及がある。

旧制高校出身者たちはその青春を懐かしむとき、よく「ああ懐かしのアルト・ハイデルベルク……」といった言い方をする。その劇を懐かしんでいるというより、母校自身が「アルト・ハイデルベルク」になっているようですらある。ドイツ語で「アルト」は「古い」という意味だが、ここでは「懐かしの」といったニュアンスだ。青春時代を過ごした土地への愛着とその今や取り返すこともかなわぬ青春を哀惜するという思いがこめられている。

では、なぜこのドイツの芝居がこれほどまでに旧制高校生たちの心をとらえたのか。文学史的には今や忘れられている戯曲で、メロドラマと言われている。皇太子と旅館の娘の

19 「独語教師仏教究め天台宗の権大僧正に」『朝日新聞』2010年10月14日。

恋だ。しかも舞台は大学であり、「高校」ではない。にもかかわらず当時の旧制高校生たちはこれに感情移入し、感激し、わが青春であるかのように、懐かしんだ。いったい、彼らはこの劇に何をみていたのだろうか。

ドイツのマイヤー＝フェルスター作の五幕ものの戯曲（1910年）で、もともとは『カール・ハインリヒ』（1899年）という同内容の小説だったものを、後に戯曲化したものだ。ドイツ・ベルリン劇場で、アルフレート・ハルム演出で上演されロングランとなり、当時は話題となった。

大学生活への愛惜をこめて、エリートの「青春」と別れを描いた作品で、大学町が主人公の第二の「ふるさと」とされている。当時の学生生活が生生きと描かれている点で、興味深い。

舞台はドイツ南西部のハイデルベルクである。ネッカー川と山の上のお城が絵のように美しい、のどかな田舎町だが、ノーベル賞受賞者を十数人も輩出したドイツ最古の大学でも有名だ。九鬼周造や三木清ら、日本からの留学生もここに学んだ。

ザクセン＝カールブルクという架空の公国の皇太子カール・ハインリヒが、このハイデルベルク大学に1年留学することになる。大学では「ザクソニア」という学生団に入り、コンパや踊りや歌に興じ、はては決闘までやってしまう。宿の女将の姪ケーティはオーストリア出身で、皇太子は彼女と恋仲になる。しかし、父王が病気に倒れ、わずか4カ月でハイデルベルクを後にすることに。再会を期して旅立っただが、ほどなく王位を継ぎ、結婚も決められてしまう。2年がたち、婚礼直前、いてもたってもいられなくなりハイデルベルクを再訪。ケーティと再会するが、彼女もオーストリアに帰って結婚すると告げる。こうして、「青春は過ぎ去りぬ」と、互いに自らの宿命を受け入れて永遠の別れを告げるのだった……。

『アルト・ハイデルベルク』は日本では、1913年に有楽座で初演、築地小劇場でも上演され、人気の演目となっていたし、鳴門の板東俘虜収容所でも1918年にドイツ人俘虜が上演していたが、今では文学史からも消えつつある作品だ。しかし、旧制高校でドイツ語テキストに使われ、演劇部が上演するなど人気があった。

すでに見てきた旧制高校におけるドイツ文化への親炙ゆえに、コンパや学生団やら、お決まりの悲恋やらで、この作品は高等学校のロマン主義的で、蛮カラな気風を作りあげるのに大いに与ったと考えられる。

暗い時代に育ち、やがて厳しい社会に出ていく日本の青年たちの方も、この劇をわがこととして受けとめてもいたのだ。「学生団」は校友会となり、「コンパ」や「ストーム」が儀式化された。つかの間はめをはずし、友情とロマンスを育みながら、もう二度と戻れぬ日々を胸にしまって、彼らはその後の人生を生きていった。「懐かしのハイデルベルク」はかつて日本の各地にも存在していたのだ。

7 旧制高校はなぜ「アルト・ハイデルベルク」になったのか

岩崎昶は「新ハイデルベルク」というエッセイで一高における「ハイデルベルク」神話を語っている。「ハイデルベルク大学だということがこの場合大切」なのであり、「すべての高等学校や大学生のあこがれの大学であった。というわけは『アルト・ハイデルベルク』（『思ひ出』とも訳されていた）という芝居のせい」であり、「日本の創作劇みたいに身近な受け止められ方²⁰」だったためと述べている。そして演劇ブームがあったことと、時代の好みにあったために、高校で人気を呼び、「ハイデルベルク」は「青春のふるさと」となったとしている。だが、築地を見ていない後の世代も、やはりハイデルベルクを特別視していたのであり、演劇だけの影響とはいえないだろう。むしろ、こうした劇のエッセンスが当時の高校で吸収され血肉化されていたのである。

東京高等学校では1930年に独逸語劇団が公演している。さらに46年、演劇部の戦後第一回目公演でも上演されている。²¹

生松敬三によると、これは敗戦後初の学生演劇の旗揚げ公演として企画され、訳者の番匠谷英一も一文を寄せている。生松は、「三〇余年後の今日、ハイデルベルクについて何事か言おうとし、書こうとするとき、やはり自分の青春時代の一齣に刻み込まれたこの『アルト・ハイデルベルク』公演についてまるで触れないですますわけにはいかない²²」として、この公演を青春の一齣として忘れがたかったと述べている。彼はさらに、「ようやくドイツ語を学びはじめ、ドイツ文化の一端に接しはじめた私たちは、いまだドイツや世界に関して無知であったからこそ、このドイツの「田舎道の路傍で摘みとった花」のような作品に自分たちの遠い憧れを満たすものを見いだしたのかもしれない。しかし、今日改めてこの『アルト・ハイデルベルク』を読み直してみると、それにしてもなんと夢のような淡い色彩でドイツの学生生活が終始描かれていることか、と思わざるをえない²³」と述べている。このように、旧制高校の学生達の外国文化への憧れとそこに学生生活が描写されていたことを、この劇が人気だった理由として挙げている。

旧制台北高等学校でも上演されている。1931年10月の高校記念祭で四幕ものとして、また1937年の第10回記念祭において「演劇の夕べ」として5月22日、23日に高校講堂で再度、上演されている。『台高』という高校の新聞部雑誌の第4号にはこのときの上演にあたって、著者のマイヤー＝フェルスターの紹介と上演舞台の写真、劇評が出ている。また『台湾日日新報』（1937年5月17日）にその記事が出ている。ちなみに台湾では新劇

20 岩崎昶「新ハイデルベルク」『映画が若かったとき——明治・大正・昭和 三代の記憶』平凡社、1980年。

21 生松敬三『ハイデルベルク——ある大学都市の精神史』TBSブリタニカ、1980年、6頁。

22 同書、6頁。

23 同書、12頁。

の移入について、台北高校の演劇部が中心的役割を果たしていて、こうした新聞・雑誌などでその上演の報道がなされていた。このようにして、植民地においても、旧制高校を中心に「青春」が広まっていたのである。

旧制高知高校でも戦後、上演が計画された。しかしケーティ役をカフェの女給にすることで内部から異論が起り、結局上演に至らなかった。また「あの有名なアルト・ハイデルベルクのように……」（『南溟』²⁴）と戦時中に一昔前の高校を振り返るときに使われているなど、高知でも高校が「アルト・ハイデルベルク」のようにイメージされてきたことが知れる。

松江高校では授業で藤野義夫教授が『アルト・ハイデルベルク』などを副読本テキストにしたという回想もあるし、松本高校の教科書リストにも載っている。²⁵

金沢も「日本のハイデルベルク」と言われた。四高同窓会報『北辰』には1988年の昭和17年卒同期会「春秋会」のことが出ている。学校の近くにあった茶房のウエイトレスが当時の高校生たちの憧れの的だった。そのヨッちゃんを会に招待したのだ。

「芝生」のヨッちゃんといえ、昭和一三年からの数年間を四高に遊学した者なら知らぬ者はない。金沢は日本のハイデルベルクであり、その当時の私たちはみんな皇太子、そしてヨッちゃんは純情可憐なケーティであった。²⁶

また織田作之助が三高時代に通っていたカフェが「ハイデルベルク」だった。彼はこの女給を見初め、やがて同棲を始め、高校退学。だが貧乏暮らしのなかで女性と死別する。まさに『アルト・ハイデルベルク』を地でいったような話である。ちなみに「ハイデルベルク」という名のカフェは全国各地の旧制高校の近くにあったという。

旧制浪速高校生が宝塚で『青春記』というハイデルベルクを舞台にした劇を観劇したというエピソードがある。宝塚線の終着が宝塚だったので、当時旧制高校生たちは宝塚を見に行くときには「エンデ」（終り、終点）へ行くと言った。ヅカガールは「エンデス・メツチェン」、略して「エンメチ」と言われた。そこで上演されていたのがハイデルベルクの学生たちの愛と友情の悲劇を描いたものだったのである。

1934年に上演されたこの『青春記』は主人公の名前（「グレーチヘン」「ヘルマン」）も設定も変えているが、これは「アルト・ハイデルベルク」をモデルにしていたのかもしれない。ちなみに浪速高校生とタカラジェンヌとの恋も芽生えたが、悲恋に終わったとのこと。²⁷ ここにも「アルト・ハイデルベルク」があったようだ。また最近では『アルト・ハイデルベルク』自体が宝塚で上演されている。

24 中川淳「土佐の山河」、南溟会『南溟』第12号、1984年、23頁。

25 朝日新聞社松江支局編『旧制松高物語』今井書店、1968年。また『旧制松本高等学校ドイツ語図書目録』（旧制高等学校記念館、2001年、161頁）には、教科書リストの中に三浦吉兵衛編『アルト・ハイデルベルク』（郁文堂、大正14年、昭和5年訂正、第4刷）が出ている。

26 四高同窓会報『北辰』1988年、6頁。

27 『ああ青春デ・カン・ショ——旧制高等学校物語』ノーベル書房、1968年。

戦後、太宰治が「古ハイデルベルヒ」²⁸（1940年）を、阿部知二が「アルト・ハイデルベルヒ」²⁹（1955年）を書いたことは、知られている。

太宰の「古ハイデルベルヒ」は、1940年3月に『婦人画報』に発表された短編である。この短編は、一見するとマイヤー＝フェルスターのものとは似ても似つかない。だが骨子はやはりそれである。

帝国大学時代の「私」が、姉から50円を借りて友達を誘って三島へ行ったことを回想するものである。1カ月も知り合いの家に泊めてもらい、豪遊するうち、たちまち金が尽きてしまう。金策に東京へ帰り、結果的に友達を置き去りにしてしまう。太宰が『ロマネスク』を書いているときのことだ。それから8年経って、妻らと三島を再訪。しかし憂鬱になる。そこは「全く他人の町」³⁰になっていたのだ。一方で三島への思いは強かった。「三島は、私にとって忘れてならない土地でした。私のそれから八年間の創作は全部、三島の思想から教へられたものであると言つても過言でない程、三島は私に重大でありました」³¹と述べる。

こうして見ると、話のパターンはマイヤー＝フェルスターのものと同じといえる。青春の地＝三島での東の間の思い出、そしてしばらくたって、その思い出の地を再訪、もはや元のままではないことを悟るという過ぎ去った青春への哀惜と現実へのやりきれない思いがイロニーをこめて表現されている。

一方、阿部知二にも「アルト・ハイデルベルヒ」という短編がある。こちらは戦後、同窓会があって旧制高校時代を思い出すというものだ。1955年に発表されている。高校の同窓会の帰りの車の中で、6人の同級生たちが先生の悪口を言い合いながら、漸次、家に帰っていく。

「やっぱり、じつにいいなあ。高校時代の友人は。何十年目に出逢っても、何もかも信じ合って話せるんだからなあ。アルト・ハイデルベルヒ！」³²

と、高校時代を回顧しながら、シニカルに戦後の時代を描きだす。ここでも「アルト・ハイデルベルク」が青春時代の代名詞となっていたのである。

こうして、『アルト・ハイデルベルク』の影響もあって、友愛、コンパ、儀式文化、脱俗と諦念、シュトルム・ウント・ドランクといった要素が旧制高校を中心に広まっていった。青春が旧制高校においてある種のバイアスを受けたまま、定着していったのである。

28 太宰治「古ハイデルベルヒ」『太宰治全集』第4巻、筑摩書房、1998年。ちなみに、同書に収められている「乞食学生」（1940年）には、『アルト・ハイデルベルク』の歌詞が出ている。主人公「私」が渋谷の街で酔って、これを歌うというシーンである。ここにも失った青春という、同様のモチーフが見られる。

29 阿部知二「アルト・ハイデルベルヒ」『阿部知二全集』第7巻、河出書房新社、1974年。

30 太宰、前掲書、257頁。

31 同書、256頁。

32 阿部、前掲書、244頁。

8 青春の煩悶と郷愁

一方で、青春は明るくポジティブなものばかりでもなかった。悲哀があり煩悶があることは、こうした小説の気分をなしてもいる。貧困や政治・社会的矛盾に苦しみ、哲学的煩悶を抱えた若者たちの心情も、青春小説の大きなテーマだった。

竹内洋『教養主義の没落』によると、大正から昭和初めにマルクス主義が浸透、左傾化し、教養主義は批判された。ところがその後、一掃され、昭和10年代にはまた教養主義が復活、今度は個々人の完成というより社会に開かれたというスタンスの社会的教養主義になったという。³³

「大正教養主義はマルクス主義を呼び、マルクス主義が弾圧されると再び、昭和教養主義が息を吹き返した。(中略)河合を代表とする昭和教養主義は、マルクス主義をかいくぐっているだけに、社会に開かれた教養主義である³⁴とする。この教養主義は、竹内によると、都市中流階級のハイカラ文化とはいえず、むしろ「田舎式ハイカラ文化」³⁵ともいうべきもので、「近代日本の教養主義文化は農村的エートスを基礎にしたものであり、都市文化、(中略)江戸や京の文化とは距離があった³⁶。これによれば、教養主義はこうした「田舎性」ゆえに、もともと地域色の強かったドイツ的風俗を取り入れやすかったともいえよう。

青春は過ぎ去ってのちに、回顧されるものである。その意味では青春と郷愁は結びつきやすい。旧制高校が青春の場だったと同時に、ここは地域主義・パトリオティズムの対象ともなっていた。近代化の中で「ハイマートロス」意識を抱いていた若者たちは、ここに疑似ふるさとを創出していたのである。「ハイマートロス」というドイツ語が定着していたように、「ふるさと」=「ハイマート」概念自体がドイツからの影響を強く受けていた。

そうしたなか、旧制高校でよく読まれた本に杉正俊『郷愁記』がある。1942年、八高において感銘を受けた本の第一位となっている³⁷。筆者は三高出身で、ドイツ留学し、客死した青年で、これはその日記を刊行したものである。青春の純潔とその悲劇といえる。彼ら青年はどこに郷愁を感じていたのか。異郷のヨーロッパに魂の「ふるさと」を求めながら、やはり生まれ故郷への思いに胸引き裂かれてしまう心情が表れている³⁸。

校風・地域色の主張は、周囲との一体感に包まれていた近代以前の状態への強い憧れと今やそれは取り戻すことができないという思いが後押ししたものとも考えられる。実際、旧制高校卒業生たちの多くは同窓会を開き、母校に愛着を抱き続け、その土地を第二のふ

33 竹内洋『教養主義の没落』中央公論新社、2012年、57頁。

34 同書、58頁。

35 同書、172頁。

36 同書、176頁。

37 『ああ青春デ・カン・ショ——旧制高等学校物語』前掲書、191頁。

38 杉正俊『郷愁記』未来社、1965年。

るさとしたのである。高知高校のある卒業生が大学に行ってから、生まれ故郷でないにもかかわらず、旧制高校のある土地に「帰省」していたという話も残っている³⁹。

ところが、台北高校生はこの点、植民地下という特殊な事情もあって、複雑な思いを抱えていた。台北高校文芸部誌『翔風』第25号（1943年3月）の「小先輩言」というエッセイでは、元台北高校生が「高校は魂の道場である」として大学とは異なるとする。「高校が一生涯の花であり、憶い出の中心である」と述べる一方で、「われわれ所謂二世（中略）は本当の故郷をもつてゐない。（中略）故郷の山や川、祖国への愛の根底をなしてゐる、この故郷を愛する心が、そのまま何の文句もなしに自己の国土を愛する心につうじてゐる。（中略）われわれはかうした生活の面をもつことを得た。本籍地は父母の故郷しか意味しない。“故郷はどちらですか”といふ挨拶はわれわれには無用である」と述べている⁴⁰。原風景としての山川のふるさとの記憶のないまま植民地にやってきた「二世」にとって、旧制高校が一つの拠り所となっていたことがわかる。またその帰結として「土」ではなく「血」のつながりに自らをアイデンティファイしていくのだった、「ただ血の尊さを信ずる力より出発する一人一人の完き自覚のみがやはりこの問題解決の根底であるに違いない。（中略）何といつても有難いことは、八紘一宇の御精神である」と。戦時体制の中、旧制高校のふるさがナショナリズムに取り込まれていくさまがみてとれよう。移民二世にふるさとはない、土地への実感はないという思いが、血に拠り所を求め、ナショナリズムへと流れていくという図式を描くことができる。

ここには台湾育ちの二世の故郷喪失感の切実さが、よく出ている。拠り所のなさに悩み、精神的支えとなる具体的なイメージを、文学や芸術にむなしく求める姿がよく表れている。このように、この時代、旧制高校は軍国主義を強制されただけでなく、その内部からナショナリズム化していった面は、否定できないだろう。

この近代以前の素朴な愛郷心は、近代化の中でナショナリズムに変容していった。だが、他方でこうしたハイマートロス、旧植民地のみならず本土の学生たちも、大なり小なり感じていたものであった。近代化の中で失われてゆくアイデンティティを希求する思いは、青年たちが共有するものだったのだ。

ただ、必ずしも生まれ故郷ではない土地への愛着が一種のパトリオティズムとして人を新たに結びつけることもあった。その一つがやはり旧制高校だったのではないか。校風・地域色の主張は、青春という共通体験によって新しい拠り所となり、精神的支えとなっていた。元台北高校生のふるさと論のように、土地への実感はないということが、一方では血に拠り所を求め、ナショナリズムへと向かうものもあるが、他方では多くの旧制高校出

39 G. ボーナーの『日本での一年』に、3月29日に、「西村」という高校の卒業生が訪ねてきたことが触れられている。高知高等学校第1回生（大正15年3月卒業）で文科乙類の32名の内の一人の「西村正志」である。本籍は兵庫で、龍野中学卒である。ボーナーのところに夏休みに訪ねてきたというのは、この当時東大に行っていたからだ。しかし彼は故郷の兵庫ではなく高知に「帰省」していたのである。Gottlob Bohner. *Ein Jahr in Japan*. Köln, 1942 (1930), S. 16.

40 台北高校文芸部誌『翔風』第25号、1943年、53頁。

身者たちがここに「アルト・ハイデルベルク」を見出したように、西洋風に制度化されながらも土着化した青春の場が新しい故郷となる可能性も秘めていたのではないだろうか。

おわりに

以上みてきたように、ドイツからの影響を強く受けて、旧制高校では「青春」概念が新たに形成・加工され、ある種の型を作り上げたのである。ドイツの小説・演劇が、急速な近代化の中で日本の若者が抱いたアイデンティティの不安と制度の間で揺れる心情に触れ、共感を呼び、青春という概念に独特の色をもたらしたといえる。また一方では、近代化で失われていった「ふるさと」の代用として、精神の拠り所とされた。たしかにこの「青春」「ふるさと」概念は脱俗的純潔主義ゆえに、土地から血へのつながりを求めるナショナリズム的傾向にもつながっていったが、また他方で、開かれた愛郷心が新たなアイデンティティのあり方を示唆していたとも考えられる。旧制高校におけるこうした開かれたアイデンティティの可能性を探っていくことが今後の課題となるだろう。

謝辞

本論文執筆にあたっては、大倉精神文化研究所において旧制高校関係の貴重な資料を閲覧させていただいた。ここに感謝する。